

本論文は、新約聖書の福音書に描かれるイエスの死と復活に関する記事、いわゆる受難物語の伝承をさかのぼることによって、福音書編纂者が目にしたであろう史料としての伝承の古層を推定して提示することを目的とした文献学的な研究である。著者の構想は、新約聖書学の枠を超えて、受難物語を含む新約聖書が置かれた歴史的文化的文脈としてのヘレニズム・ユダヤ世界における宗教文化史的状況の考察を目指すものであるが、この点については主に付論において今後の研究への展望として示されている。本論文は、その実りある遂行のために不可欠な、新約聖書学の知見に立脚した文献学的基礎作業を行うものとして位置づけられる。

論文は、序章と付論を含めて全5章からなり、末尾に聖書略語表及び文献一覧を配している。第1章は、イエスの死を扱う諸先行研究が吟味され、古層を再構成するためにふさわしい方法論上の手続きを検討する。イエスの死を扱う伝承形態には、復活宣言の定型文を示す「ケーリュグマ」と、イエスの死の経緯を記述する「受難物語」の2種類がある。歴史的にはすでに前者が成立していながらなぜ後者が存在したか、という根本的な問いから説きはじめて先行研究の整理が行われ、最古のマルコ福音書のみから、複数の福音書資料の比較考察による古層の想定へと研究が展開してきたことを丹念に説明する。その結果、現時点においてはマルコ福音書とヨハネ福音書の受難物語記事に共通する要素に基づく再構成が、もっとも信頼できる方法論的手続きであると結論づけられる。

第2章は、その方法論に基づいて古層の再構成に必要な前提作業が行われる。両福音書の受難に関するエピソードのうちで、どちらか一方にしか現れないエピソード、両福音書の前段階ですでに編集されていたと想定されるエピソードが厳密に分類される。ここで著者は、全エピソードのギリシア語テキストと日本語訳を、重なる部分と重ならない部分に留意しつつ並置した一覧表を作成し、両福音書に共通する部分のギリシア語を摘出する。

第3章は、この基礎作業に基づいて、マルコとヨハネが共通に用いたと想定される受難物語の伝承が追及される。マルコの物語の流れとヨハネのそれとの間にある違いに留意しつつ、古層の始まりをイエス殺害の謀議（マルコ14章1節）、終わりの部分をイエスの埋葬（マルコ15章46節）と想定する。また、「塗油物語」「神殿への批判行動」「空の墓」の逸話は両福音書に共通するが、伝承史的考察から塗油物語のみを古層に含める。その結果、古層伝承は全10場面、即ち、殺害の謀議、エルサレム入場、塗油物語、最後の食事、捕縛、大祭司の尋問、ピラトウスの尋問、嘲弄、磔刑、埋葬が想定され、キリスト教の根本教義である復活信仰が含まれていないことが仮説として提示される。

本論文は、研究史を入念に精査し膨大な学説史を整理した力量において、聖書学的研鑽の蓄積を物語るものであり、原典のテキスト分析においても優れた理解力が発揮され、現在考える受難物語の古層に関する研究に一定の学問的成果をもたらしたことは明白である。よって、本委員会は本論文を博士（文学）にふさわしいものと判断する。